



われらが常備役

WARERAGA JOBIYAKU

乳がん検診

川口工業総合病院プレストセンター 山本 隆

乳がんは年々増え続けて、2015年は年間約9万人の方が乳がんになりました。これは、日本の女性12人に1人が乳がんという計算になります。がん検診の目的は、そのがんで亡くなる方を減らすことです。乳がん検診で12人に1人という数字は減らすことはできません。しかし、その1人を早期に発見できるか否かが検診の良し悪しを決めます。発見されなければ、見つかるのが遅ければ命を奪うであろう乳がんを、検診で発見する。そして、その乳がんから命を守る。そんな検診が求められています。



40歳以上の触診とマンモグラフィによる市町村の対策型検診は、触診だけの時代に比べ、多くの乳がんを発見しました。しかし、目に見えて乳がん死亡率は低下していません。これは、発見すべき乳がん(命につながる乳がん)を見つけてないということでしょう。乳房は人種・年齢等によって人それぞれで、マンモグラフィだけでは不十分な人が日本人には多くいます。高濃度乳房(デンスプレスト)のことで、メディアで話題になりました。当院では、個々に合わせて「命につながる乳がん」を発見できる乳がん検診を提案しています。これまで積極的に超音波検査を勧めてきましたし、トモシンセシスという3Dマンモグラフィも導入しました。もちろん全員にこれらの検査が必要なわけではありません。全員をマンモグラフィで評価することに無理があるということです。



マンモグラフィと触診による検診で、乳がんを疑われ要精検となった人が100人いたとします。そのうち精密検査で実際に乳がんである人は2~4人位です。超音波検査やトモシンセシスの併用検診では数倍の乳がんが発見できま

すが、それでも残りの多くは良性病変や正常構造が乳がんに見えただけで、実際には乳がんではありません。要精検となった方には心配をおかけしますが、検診結果の要精検とはそういうものとご理解ください。だからこそ、怖がらずに必ず精密検査を受けてください。また、どんな検査を受けても、毎年検査を受けたとしても、すべての乳がんを見つけることはできません。検診を1回受けたから、いつまでも安心というわけでもありません。個々に合わせて、検査間隔を設定することも重要になります。



12人に1人が乳がん、逆に言えば12人に11人は乳がんにならないということです。検診そのものの在り方も、時代とともに変わっていくでしょう。それでも、今日も乳がんを心配されて検診に来られる方がいらっしゃいます。そうした方々の期待に応えられるよう川口工業総合病院プレストセンターは日々精進してまいります。

